

ハングリー精神

学問に、これでよいという到達点などあり得ない。むしろ知らないこと、解らないことがありすぎるのが普通だと思う。そういう意味で、ゴールという言葉があまり好きではないが、近ごろは治療のゴールとかが流行りである。治療のゴールは、当たり前だが個々の患者さんによって異なり、それぞれの患者さんで一番良くなるところまで持っていくのが、われわれの役目だと思う。疾患によってゴールが設定されてしまうのは違和感を覚えるし、治療のゴールという言葉から、その地点まで持っていければそれでよいという意味を連想してしまうのは筆者だけだろうか。

昔は、大学でうごめいている助手クラスの人が大勢いた。部活と同じで、そういう人が多い所帯は層が厚く、活気もあり、いい仕事も出てくる。時代と共に、大学であくせく働くことは敬遠され、生活が豊かになるにつれ、ハングリーなどという言葉も消えてしまいそうである。しかし一方で、ハングリーさは新たなものを生み出す原動力になるのである。

バブルの時代に、次から次へヒット曲を連発し、まさに飛ぶ鳥を落とす勢いだった小室哲也が、ある時期からどうして急に曲を作れなくなったのか不思議だが、巨額の富や名声を手にしてしまうと、次へのモチベーションが薄れてしまうのかもしれない。そういう意味で、今でもコンスタントに楽曲を生み出すユーミンやサザンはすごいと思う。第二のユーミンという触れ込みの人は何人も出たが、皆途中で消えた。それは、単に時代の流れに乗るのが上手いとか、時代のニーズに対する感性に優れているとかだけではなく、何かをコンスタントに産み出すということが如何に難しいかを物語っているといえよう。絶頂期の時はすでにもう落ちている時期だと、ビートたけしが昔深夜放送で喋っていたが、本当にその通りだと思う。

振り返って、今の若い人は、恵まれすぎているのではないかと思う。巷に教科書は溢れかえっているし、教育にも力を入れているところは多い。女性医師の扱いも昔とは雲泥の差である。教育プログラムがしっかりしている病院は、研修医の人気も高く、なかなか採用してもらえない。学生は、どこで研修するのがよいか、情報収集に余念がない。しかし、そんな手取り足取りの指導を、今の若い人は本当に求めているのだろうか。筆者が医局長の頃、たまたま卒業生の謝恩会に出席する機会があった。そこでベストプロフェッサーなる賞を贈られた、ある教授のスピーチは、筆者の考えと全く同じであったのを覚えている。それは、卒業後にどこで研修しようが大きな差はない。自分は研修医を徹底的にけなす。そしてそこから這い上がってきた人がすごい、というような内容だった。要は、本人の頑張り次第なのである。

金銭、地位や名誉はいざ知らず、知的欲求がないところに学問的進歩はない。恵まれすぎはよくないと、つくづく思う。